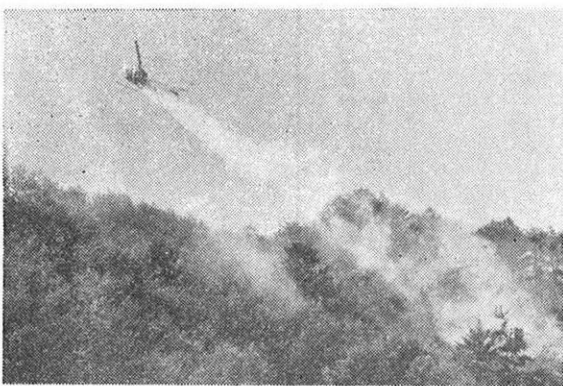


# 熊本林業のビジョン

勉 谷 塩



(ヘリによる松林の航空防除)

## はじめに

題名のようなテーマに四つに取り組もうとすれば、少なくとも次のような諸点を、一応固めておかなければならない。  
(一)熊本県の林業をその一部としても日本の林業が、時代の潮流の中で、どんな方向を辿ろうとしているのか。これは結局、大きくは世界の林業や木材の動向とも関連してくる。

(二)林業という産業も熊本県内の経済活動の一環なのである。林業の基盤となり背景となるところの、県の経済と社会情勢を知っておくこと。また県民の意向を反映するはずの県政の、現段階とその構想なども頭に入れておくことが都合である。

(三)熊本林業の発展過程を知り、現状分析を十分にして、それらの特異性や長所短所をつかんでおかなければならない。その内容がとくにバラエティに富んでいるから、かなり地域的に区分してそのような作業をしておくことが望ましい。

右のようなことは、できるだけこれを数字的なとらえ方でやっておく必要がある。そんな風にデータと思考の整理をやることによって、おのずと、実態に即した熊本県林業のビジョンも、浮び出てくるのではなからうか。

ところで私は、熊本県の一般事情のみならず、林業の近況についても深い理解がある訳ではなく、また統計資料も目星

しい手がかりも手許に持たない。(一)の洞察には大過ないつもりであるけれども、記述は観念的、非具体的になりやすいので、お断りしておきたい。

## 外材に抵抗できる

### 林業に

この頃時折耳にすること、「木材はだんだん無くてすむようになるのではないか。建築・土木・工業原料等々、みんな、木材に代替する物資がある。木材を原料としない紙やプラスチックの時代に、五十年も三十年もかけて木材を作る林業なんて、間抜けのやることではないか。」

またいわく、「外材は、金額で四億四千ドル、わが国輸入品目の第三位にのし上り、木材総需要量の四分の一にもなろうとしている。貿易の自由化は動かすべからざる命題で、今後は日本の林業も斜陽化をたどる以外にない。」

右のようなことが、果して事実であり、あるいは事実となる可能性が非常に強いとすれば、今更熊本林業のビジョンなどを云々すること自体がナンセンスである。せいぜい「山を美しく彩る樹木でも殖やして、観光産業の一助になさい」とか「防災のためには森林が役立ちますよ」ぐらいのことですむであろう。しかし幸か不幸か、前の二つとも当を得ていないので、私は更に書き続けねばならないことになる。

すなわち、木材に代替し得る有力な物資もたしかに出てきたが、一方で木材あるいは木材質を最適とする新しい用途も開発されつつあるし、人口増加や生活水準上昇により、木材の需要増加は、今までの伸び率を上廻りこそすれ、下がるものではない、というのが、世界の専門学者の一致した意見である。

またわが国の木材が、国際価格より割高になってしまったことに、一つの重要なポイントがある。しかし今こそ、木材の値上り依存一辺倒のムードを反省し、経営の合理化と生産の効率化を進める機会なのである。木材生産期間の長期性とか、限られた林地での地代の絶対的強みなどという、林業の特殊性の上に安坐した、百年一日のような林業経営では、もはや林業は見放されてしまう。外材だって価格は上ろう上ろうとしているのであるから、林業木材業内部の、技術や生産関係を整え、政策上の配慮をすること、外材をこれ以上大巾にはびこらせずにすると思うのである。

とにかく第一の疑問に対しては全く気にする必要はない。第二に対しては、抵抗力の強い体質を作ることによって、十分避け得るが、相当の努力を傾注する必要があると云いたい。これは、熊本林業の今後の在るべき姿の想定に際しても、当然考慮に入れられねばならないことである。

## 中九州か南九州か

熊本県は、九州中央部に、有明・不知火の二海を抱いて蟠踞(パンキョ)する雄県である。阿蘇・市房を含むいわゆる九州の屋根がその東方の境を劃し、日本三急流の球磨川も、十一年前、阿蘇の火山灰を運んで熊本市を埋めた白川も、川という川の主たる方向は西向きである。その間に、藩政時代から米の豊産を以てきたこえた熊本平野や、八代平野が開ける。世界の火山阿蘇と海洋美の天草とは熊本県を代表する二大国立公園で、景観の美はスケールの大きさを特徴づけられる

## 追いつき追いつきせムード

水源森林組合の場合(菊池市)



水源森林組合が、労務班の組織をつくったのは、今年に入ってからだから、やっとその緒に付いたばかり



木材の搬出作業

である。また、木材共販所も、この一月に、水源にあつたものを菊池市中心部に移転新設したばかり。何か若々しい、ひたむきな前進姿勢が感じとれる組合事務所のある空気があふれている。この組合では、先進地に追いつき、追いつきが合い言葉なのである。水源森林組合は、決してズバ抜けた規模をもった組合、強力な組合とは言えないだろう。むしろ、五稔未満の小面積所有者が九二%を占めるという、熊本県林業の典型ともいえるべき組合なのである。しかし、それだけに、組合員一人一人の経済性を確かなものにするための努力は、真剣そのものである。いかなれば、森林組合本来の設立目的の実践という点、そのバランスのとれた指導、販売、購買、利用などの

が、県内には概して緑を最重要の要素とする風景が多い。自然的にも、人文的にも、すこぶる複雑で変化の多い熊本県であるから、林業もまず、国土保全のための保安林業、いま注目の観光林業の必要性をあげておかなばならない。

然らば主として経済的な林業の側面は、いかかであろうか。私は十年余り前、九州の林業構造を考察するに、通称の北九州、南九州という二区に対し、とくに中九州という地域を設けて、それぞれの特徴を指摘したことがある。中九州とは、阿蘇・久住を盟峯として東西にくり広げられる原野に、

畜産業をその土地利用面の特徴とし、原野造林の余地を多分に持つ地帯である。経済発展の進度に照応して、人工林率も全国的に高い北九州が、私有林優勢であるのに対し、中九州は広義の公有林(入会林野)の割合が大きい。然るに南九州は国有林の割合が大きく、そこは天然生広葉樹林に富み、林種転換造林が進められるべき地帯である。

熊本県という行政区劃を、このような三区分の何れかに属させようとする、大きく当惑せざるを得ない。大きさは見て、その北半は明かに中九州に入るとしても、南半は、これはもはや南九州の

各事業部門の実績という点で、高く評価されているのである。さらに、協業促進対策事業により、下刈機、集・運材機を導入し、下刈りほか林産事業業務班は合わせて二十四名。佐々木常務理事は、「例えば、五木村のケースのような直接所得につながる問題としても意味があるが、これからの林業が、コストダウンを進める以外に道はないんだという意識を組合員自身に持ってもらうことが、機械化への認識とか、自家労働のロスとかを、具体的な形で示してみせたかったのだと、労務班の意義を語る。

九月一日付で、竜門と合併し、菊池市森林組合として出発するが、組合自身の力を強固なものにしたいという悲願も遠からず実現するに違いない。(W)

カテゴリーに含ませねばならないからである。熊本県林業の複雑性は、まずそんなところから説かれねばならない。

ここにいう北九州が、中九州に移行しようとする辺りに小国林業がある。すでに二百余年前に造林の歴史を有し、中径用材生産林業として美林を形成してきた小国林業は、全国的にも日田林業とならび称されてきたものである。その対極は南九州に入るべき南東隅の球磨林業で、後進山間地帯の代表的産物である木炭以外は、名を売るものがなかった。また五木から五家荘にかけては、今でこそ秘境のヴェールもはがれたが、開発度はまだまだ低い。西南日本外帯山地の特色をそなえたこれら地方十数万町歩の森林は、今後への期待を大きく藏する。

西南隅の芦北林業もまた、異色あるマツの短伐期林業で、林業熊本県の名を世に知らしめるに力があつた。木場作農業と結びつき、坑木・バルブという恰好の用途をとらえて伸びたこの林業は、農家林業のモデルであり、今喧伝される家族経営的林業の先駆にあげることができ。しかし一つの転換期にさしかかっているのではあるまいか。

## 材木供給の基地として

菊池や鹿木や上益城の諸郡にも、地方的に味わいのある国営・民営の林業がある。各地に設けられた県営林も一万町歩を突破して、先人の苦勞を物語ってい